公開講演会記録

ボルゲーゼ美術館に見るギリシア神話世界

美術史家　塚本　博

1．はじめに

かつてヨーロッパ諸国では、18世紀から19世紀にかけて「ローマの驚異」という言葉が盛んに使われ、旅行者たちは憧れのローマをめざした。画家たちは古代の遺跡を描き、文化人たちは永遠の都のあちこちで豊穣な芸術品を実見して祖国へとその驚異を伝えた。しかし、世界大戦が勃発した20世紀になると、ローマは次第に荒廃し、市中を歩いてもパリやウィーンほどの洗練された街並みや豪華な建造物は見られなくなる。ローマの驚異は、宮殿の角を曲がると突然現れるトレヴィの泉や、映画『ローマの休日』における最後の記者会見場として使われたコロンナ宮殿辺りに、かつての栄光を偲ばせる。このような状況下にあって、ローマ市中でもっともよく昔日の驚異を体現しているトポスがまさにボルゲーゼ美術館（**写真1**）である。この美術館の建築はいわゆるヴィラ、別荘の邸宅であり、ルーヴル美術館やヴァティカン美術館のように巨大な建造物ではない。したがって上階の絵画と、下階の彫刻を適度な時間で一巡することができる。

ローマ教皇パウルス五世の甥にあたる枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼの美術収集を基盤として成立したボルゲーゼ美術館は、ティツィアーノやベルニーニなどの巨匠による数々の名作により訪問者を魅了する。しかし、この

写真１　ボルゲーゼ美術館

瀟洒な美術館を訪れる者は、めざす名画以上にその壮麗な室内や、調度品にも目を奪われ、特別な世界に入り込んだ感興をおぼえる。そこにはキリスト教の聖書関連の宗教美術と並んで、ギリシア神話世界が歴代の美術家により豊かに展開して、誰もがここに「ローマの驚異」を実感する。ローマはカトリック・キリスト教の中心地でありながら、ギリシアからの美術遺産を受け継ぎ、地中海の古典古代美術を継承してきた。とりわけギリシア神話を主題にした美術品には名作が多い。

2．変身物語のギリシア神話

主神ゼウスや知恵の女神アテナが現れるギリシア神話がローマの作家オウィディウスにより受け継がれたとき、メタモルフォーシス（変身譚）が特に好まれ、多彩な脚色が加えられた。そのため古代のギリシア美術にはそれほど作例のない変身物語が、イタリア美術ではほとばしる泉水のごとく様々な傑作を生み出している。壮麗なボルゲーゼ美術館をこの変身物語の視覚化という観点でめぐってみると、意外なくらい趣向に富んだ名品に出会う。レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロの影響を受けた北イタリアのルネサンス画家コレッジョの「ダナエ」（１５３１頃）（**写真２**）は見ごたえのある代表作で、ゼウスが天から黄金の雨となって降り注ぐ。ダナエの父、アルゴス王アクリシオスは、自分の娘の子により将来殺害されるという神託を聞き、娘のダナエを青銅の地下室に閉じ込めてしまった。さすがのゼウスも鳥や獣への変身では彼女に近づくことができずに、黄金の雨に身を変えたのだ。コレッジョが描く美しい娘ダナエは、そうとは知らずに寝台に身を横たえている。左手の愛の神は頭上を見上げ、黄金の雨に気付いている。画家はこのような変身物語を４点連作で描き、「レダ」はベルリン国立美術館、「イオ」と「ガニュメデス」はウィーン美術史美術館にある。これらは、マントヴァの支配者ゴンザーガ家が神聖ローマ皇帝カール五世に献上するために、コレッジョによりすべて制作された。

写真２　コレッジョ「ダナエ」

万能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチも変身物語に関心を抱き、レダを構想して各種の素描などを手懸けている。そのレオナルド原作の写しがボルゲーゼの「レダと白鳥」（16世紀前半）（**写真３**）である。ラケダイモンの子チュンダレオスがスパルタの王になったとき、その妃は美貌のレダであった。天空のゼウスはこの妃レダに近づくために、白鳥に身を変じた。絵の中の白鳥は、まるで彼女を抱くように大きな翼を湾曲した腰にあてがっている。その嘴は彼女に口づけを求めるかのようだ。彼女の体軀は官能的にＳ字

曲線を描き、白鳥の首はさらに大きく曲がりくねる。こうした写しは、各美術館に複数所蔵されているが、それらを比較検討すると、背景は個々に異なるが、レダと白鳥の組み合わせはほとんど共通した図柄になっていることがわかる。後続のラファエロもまた、このふたりの並ぶ情景だけを素描にしている。これらのことから、おそらく、レオナルドは中心部分だけをしっかり描き、背景については未完成のままであったと推測される。彼らの交接の結果、レダが生んだふたつの卵は写しにより異なり、ボルゲーゼの作例では、すでに成長した双子の幼児が見られる。

美術館階下のバロック彫刻にも変身物語の秀作が旅人を待ち構えている。それはベルニーニの「アポロンとダフネ」（1622～25）（写真4）であり、この美術館でもっとも人気が高い。生涯処女を狩りの女神ディアナに誓ったダフネは、どんな美青年が言い寄っても、相手にすることはなかった。そんな清純なダフネに太陽神アポロンは恋をして、彼女を追い駆ける。輝けるアポロンがダフネに追いつき、彼女に触れようとした瞬間、ダフネは身を翻して月桂樹に変身する。その指先は葉に変わり、下半身は樹木の幹へと姿を変じた。その体軀は激しく回転するように見える。ルネサンス期にも同主題作品があるが、それはきわめて静的であり、ベルニーニ作品はまさにバロックの動勢感を体現している。この神話物語によりダフネすなわち月桂樹はアポロンの樹木となった。このベルニーニ作品はメタモルフォーシスを視覚化した美術史上最高の逸品と言えるだろう。

エステ家の宮廷があった北イタリアのフェラーラには、ギリシア神話の作品が多い。すでに15世紀の頃、スキファノイア宮殿にアポロンやアテナの登場する大きな壁画が描かれている。このフェラーラの有力画家ドッソ・ドッシの「ディアナとカリスト」（1528頃）は、狩りの女神ディアナに処女を誓ったカリストの数奇な運命を物語る。天空のゼウスはこの可憐な彼女に懸想し、ふたりは夜をともにして交わり、やがて彼女は主神の子を宿してしまった。そのことを周囲には秘密にしていたのだが、ニンフたちとの水浴の際に、女神ディアナに彼女は裸体を見られてしまう。膨らんだ腹部はすぐに女神の目にとまり、その懐妊は露見する。処女の誓いを破った罪に、女神はカリストを熊に変えてしまった。ドッシの絵では、中央下に妊娠した腹部を露わにしたカリストが見える。

この主題はヴェネツィア派の巨匠ティツィアーノの作品にも取り上げられている。その英国にある絵では、多

写真３　レオナルド原作の写し「レダと白鳥」

写真４　ベルニーニ「アポロンとダフネ」

くのニンフの中にカリストが腹部を見せて登場し、女神は右手に豊満な裸体を見せて現れる。この主題でふたりの画家はどちらも、カリストを人間のままに表現し、変身の話は見る者にゆだねられている。その後、カリストの子が森で出会った熊が実の母とは知らずに殺そうとしたとき、天空から下界を見ていた主神ゼウスは彼女を哀れに思い（あるいは責任を感じて）、天に上げて輝く大熊座にしたという。

3．ローマ建国神話の原点

審美眼のある美術収集家の枢機卿シピオーネ・ボルゲーゼは、交遊のあるローヴェレ家からバロッチの名画「トロイアから逃れるアイネイアス」（1598）（**写真5**）を贈られた。これは今もボルゲーゼに展示されているが、ギリシア方の軍勢により落城したトロイアから勇者アイネイアス（イタリアではアイネアス、あるいはアエネアス）が家族を伴って脱出するという劇的な神話物語である。この逸話はその後、アイネイアスがローマに渡り、ローマ建国神話の原点にもなっている。すなわち、雌狼により育てられた双子の兄弟ロムルスとレムスを生んだ母は、王女レア・シルウィアであり、彼女はこの勇者アイネイアスの血を受け継いでいた。しかも、アイネイアスの父はアンキセスであり、彼は美の女神アフロディテ（ヴィーナス）と結ばれて勇者になる子をもうけた。

写真5　バロッチ「トロイアから逃れるアイネイアス」

このようにローマの建国に関わる英雄であるから、シピオーネは強い関心を抱き、やがて彼がその天才を認めた青年彫刻家ベルニーニにこの神話主題を彫刻で造るように委託した。

写真6　ベルニーニ「老父アンキセスを担ぐアイネイアス」

こうして誕生したベルニーニ初期の作品が「老父アンキセスを担ぐアイネイアス」（1618―20）（**写真6**）である。バロッチのもとの絵画では、背景に燃え盛るトロイアの城が見えるが、彫刻ではそれは当然割愛され、勇者が老父を担ぎ上げ、息子アスカニウスを伴う巧みな群像になっている。このふたつの芸術作品を比べてみると、絵画と彫刻という芸術分野の原理的な違いが歴然とする。絵画芸術は本来物語性を豊かに展開し、彫刻芸術は逆にひとつの塊の中に物語性を凝縮してモニュメンタルな造形に仕上げる。このようにローマ建国神話の端緒は、祖国愛に満ちた勇者の彫刻として枢機卿の前に結実し、ここにバロック彫刻が醸成される。この経緯を考えると、シピオーネ・ボルゲーゼは単なる美術収集家である以上に、言わばバロック様式のプ

ロデューサーの役割も担っていたことがよく理解できる。

トロイア戦争には長大な顛末があり、ギリシア方の英雄アキレウスがトロイア方のヘクトールを打ち取る劇的な場面が名高い。したがって、トロイアがアキレウスの遺児ネオプトレモスにより打ち破られる以降の物語は、ギリシア方から見れば最終章のごとき情景であるが、シピオーネやベルニーニにあっては祖国ローマの原点となっていた。こうしてバロッチの絵画のエッセンスは、ベルニーニの彫刻に結晶化して受け継がれ、この歴史にこそ、絵画と彫刻をアンサンブルとして収集展示するボルゲーゼ美術館の意義深い理念が明示される。本邦においては、この絵画と彫刻が互いに照らし合い共鳴するような美術館は企図されていない。

4．冥界の王とサテュロス

シピオーネに認められたベルニーニが制作した次の「プロセルピーナを掠奪するプルート」（1621～22）（写真7）は、まさに動きに溢れるバロック彫刻の典型的な作例である。神話上の名前は各国により呼び方が異なるが、ギリシアでは「ペルセフォネを掠奪するハデス」と表記される。ハデスはすなわち冥府の王、支配者であり、彼は地上に現れて、穀物の女神デメテルの娘ペルセフォネをさらった。そして彼女は柘榴を食べてしまったので、冥府から帰ることができなくなる。ラファエル前派の中心的な画家ダンテ・ゲイブリル・ロセッティが描くペルセフォネは手にその柘榴を持ち、その表情には不安な心情がきざしている。地下に閉じ込められた娘を探して、女神デメテルは火をかざし各地をめぐり、主神ゼウスにその嘆きを訴えた。そこでゼウスはハデスに対して、ペルセフォネが毎年3分の1は冥界にとどまり、あとは神々と暮らすように命じた。こうして彼女は春になると、地上に戻ってくることができるようになった。この逸話は、彼女が豊穣の女神の娘として、その「種子」であったことを暗示し、地下にまず蒔かれ、やがて芽生えて春には地上に現れることを物語る。

写真7　ベルニーニ「プロセルピーナを掠奪するプルート」

ベルニーニのプルートすなわちハデスは冥界の王たる冠をかぶり、力任せに細身のペルセフォネを抱き、さらおうとしている。彼女の足元には咆哮する怪犬ケルベロスが見え、群像の情況設定を巧みに演出している。冥府の王にあらがう娘は彼から逃れようと必死でその頭部を押しのけようとしている。先行するアイネイアス群像に比べて、数年のうちにベルニーニの技量は飛躍し、バロック彫刻の巨匠に成長したことが理解できる。この頃、彫刻家はまだ24歳であった。彼の大先輩ミケランジェロは、同じ年で名高い「サンピエトロの

ピエタ」を彫り上げている。

このペルセフォネの掠奪は、一見すると狂暴な男に可憐な娘がさらわれるという暴力的な神話主題に見えるが、西洋美術史を振り返ると、そこには突然の死への象徴性が宿っていることが見えてくる。古代ローマのサルコファゴスと呼ばれる死者の石棺にはこの特異な主題がしばしば現れ、各地に図柄がわかる作例が残っている。筆者はアーヘン大聖堂の宝物館と、アマルフィ大聖堂の中庭でそれを実見したことがある。どちらもハデスは戦車に乗り、ペルセフォネを抱えて冥界に向かい疾走している。これはすなわち、老衰、病気、事故などにより突然に亡くなった人への供養のごとき神話の選択である。古今東西どこでも、突然の死は、冥界からハデスが現れてその人をさらったと解釈するしかない。

彫刻の第8室はシレノスの間と呼ばれ、酒神バッカスの眷属シレノスやサテュロスなどが見られる。特にリュシッポス原作の模作「踊るサテュロス」（2世紀）は顔中に髭をはやし、下半身が獣のサテュロスを巧みに造形化している。古代ギリシア彫刻の巨匠リュシッポスは、古典後期の作家で腕を自在に周囲に伸ばして、人物が空間にはたらきかけるような作風を打ち立てた。このサテュロスにも酔って踊る動作が如実に表れている。ミケランジェロのバルジェロ国立博物館にある「酔えるバッカス」では、酒神の背後にサテュロスは少年の姿で登場し、葡萄を食べている。これらの酒神バッカス（ギリシアではディオニュソス）、サテュロス、マイナデスたちは、ギリシアの陶器画、ローマ浮彫などに頻繁に表れ、歴代の美術家の想像力を強く刺激した。

この部屋のサテュロスはデンマークの彫刻家トルヴァルセンが近代になって修復している。彼はカノーヴァと同じ新古典主義の名高い彫刻家で、ボルゲーゼ美術館の内装には、この新古典主義の装飾が至るところに反映している。この部屋の元来の主役であった多くの古代彫刻は、ナポレオンの支配した時代にルーヴルへともたらされた。これらはフランス側の様々な美術品との交換を経て運ばれたものであり、ルーヴルの古代彫刻部門には今もかなりの数のボルゲーゼ旧蔵作品が展示されている。

5．横たわるパオリーナ

ボルゲーゼ美術館では、ギリシア神話の主題を扱った個々の作品が優れているばかりでなく、展示している部屋の環境自体にある種共通した雰囲気が感じ取れる。地上階右の第1室には、ナポレオン・ボナパルトの実妹「横たわるパオリーナ・ボルゲーゼ」（1808）（写真8）があるが、彼女はりんごを手に持ち、美と愛の女神ヴィーナスに扮している。この作品はイタリアの作家アントニオ・カノーヴァの代表作である。ナポレオンは戦術に才能を発揮しただけなく、政略結婚にも敏感で、美しい妹パオリーナを斜陽のボルゲーゼ家に嫁がせた。フランスの英雄には明らかにボルゲーゼの膨大な美術コレクションが視野に入っていた。

事実、それほどの価値のない美術品と交換に優れた古代彫刻が次々にローマからパリへと運び出された。

ロココ様式から新古典主義へと時代が移り変わると、ナポレオンの近くには画家ダヴィッドと彫刻家カノーヴァが登場する。現在ルーヴルにある、カノーヴァの彫刻「アモールとプシュケ」は、ナポレオン麾下の指揮官ヨアヒム・ミュラが当時所蔵していた。英雄はこの傑作を見て、その愛の物語と表現の美しさに魅せられた。その結果、彼は次々に新古典主義の巨匠カノーヴァに作品を委託する。ボルゲーゼのパオリーナもそうした流れの中で制作された彫像で、典雅な女性像からベッドのクッションに至るまで精巧に、そして優美に彫り出されている。ここで目を天井に向けると、そこには18世紀末に描かれた「パリスの審判」が見えてくる。若い牧人パリスは、3人の女神、アテナ、ヘラ、アフロディテ（ヴィーナス）からもっとも美しいと思うひとりを選び、彼女に黄金のりんごを与える役目をゼウスによって課せられた。そこで若人はヴィーナスを選び、彼女にりんごを渡すことになる。つまりここで見事に下にあるりんごを持つ彫像のパオリーナに物語は接続する。彫刻は一種のモニュメントであるから、りんごの経緯については語ることができない。それが天井画で謎解きされるのだ。

写真８　カノーヴァ「パオリーナ・ボルゲーゼ」

ここにおいて、はじめに述べたような「ローマの驚異」と呼べる空間芸術が明白に見えてくる。すなわち、ボルゲーゼ美術館は巨匠たちの名画や名作を、単体として見せるだけではなく、明らかにその部屋全体で共鳴するような芸術的ミュリューを数百年かけて創出している。そこには美術史上に名を残す巨匠も、マイナーな画家も時代を超えて共同で参画し、このヴィラ美術館を驚異の空間に仕立てている。このような視点で美術館を見て回ると、第11室の天井画「神々の会議」が、まるで神話全体の序論のように神格が出揃った画面に見えるだろう。しかも、そこでは変身譚の一例である「鷲にさらわれたガニュメデス」が、神々に紹介されている。しかし、だからと言って室内の至るところにある絵画の主題を詳しく読み解く必要などはない。自分が知っている範囲の神話物語を、絵を通して楽しめばいいのである。心に余裕がなければ芸術世界を真に受容することなどできない。

6．美神ヴィーナスの楽園

イタリア美術を愛したドイツの文豪

ゲーテは、ワイマールの自邸にティツィアーノの名作「聖愛と俗愛」のうち、裸体のヴィーナスだけの模写を飾っていた。古典美術を愛好する文豪にとっては、ボルゲーゼのこのヴィーナスこそ古典的な美の典型と映っていたのであろう。この「聖愛と俗愛」（１５１４）は、ヴェネツィア随一の画家ティツィアーノ・ヴェチェリオが青年期に描いた作品で、通常右に裸体のヴィーナス、左に着衣のヴィーナスと解説される。それはかつて図像解釈学の大家パノフスキーがふたりの女性を象徴的にそのように解釈したことによる。しかし近年になり、洗浄修復した結果、絵の中にふたつの名家の紋章が見出され、この絵は一種の結婚記念画であることが明らかにされている。

筆者が先ごろ翻訳出版した『ティツィアーノの女性たち』（２０１４年、三元社）の著者ローナ・ゴッフェンは、ヴェネツィアの男性ニコロ・アウレリオとパドヴァの女性ラウラ・バガロットの結婚を記念した絵であることを両家の複雑な歴史を探求して証明している。この見解に基づけば、左にいる女性はまさしく新婚の女性を理想的に表していることになり、その衣裳や薔薇の花も結婚にふさわしい。しかし、その新妻は決して個性的な肖像としては描かれていない。そこには右の裸体のヴィーナスとの調和関係もいくぶんかは図られているだろう。彼女たちふたりの間には浮彫のある古代石棺が置かれ、背後から愛の神アモールが、アトリビュート（持物）である愛の矢を探すかのように水の中に手を入れている。カノーヴァの「ヴィーナスとしてのパオリーナ」やこのティツィアーノの「聖愛と俗愛」以外にも、この美術館にはドイツの画家クラーナハの「ヴィーナスとアモール」（１５３１）や、ブレシャニーノの「ふたりの愛神の間のヴィーナス」（１５２５頃）などがあり、ヴィラ建築を飾るにふさわしい美神たちの共演が世界からの訪問者たちを楽しませてくれる。

（２０２４年12月５日・公開講演会）

筆者略歴（つかもと・ひろし）

１９５０年東京生まれ。早稲田大学大学院文学研究科美術史学博士課程修了。ルネサンス美術専攻。国際基督教大学、早稲田大学、明治学院大学、横浜市立大学でルネサンス美術やバロック美術などの講師を務めてきた。その間、20年以上にわたり、毎年海外美術ツアーを企画し同行講師として、欧米の美術都市や美術館に赴く。現在は朝日カルチャーセンターやＮＨＫ文化センターで、西洋美術史講座の講師をしている。著書は『イタリア・ルネサンス美術の水脈』（三元社）、『聖なる中世美術の輝き、キリスト教美術の展開』（ＤＴＰ出版）、『すぐわかる作家別・ルネサンスの美術』（東京美術）など。訳書は、Ｇ・フォッシ『フィリッポ・リッピ』（東京書籍）、Ｒ・ゴッフェン『ティツィアーノの女性たち』（三元社）、Ｒ・ゴッフェン『ルネサンスのライヴァルたち』（三元社）など。